

## 山口県におけるスナメリの地方名の研究

石川 創<sup>1)</sup>

### A variety of local names of finless porpoise *Neophocaena phocaenoides* in Yamaguchi prefecture, Japan

Hajime Ishikawa<sup>1)</sup>

#### 要 旨

山口県内におけるスナメリ *Neophocaena phocaenoides* の地方名(別名)について、県内の漁業協同組合へのアンケートおよび聞き取りで調査を行った。回答数はのべ49件で20種の名前が収集できた。スナメリの地方名は県東部(柳井市、上関町、周防大島町等)では「デゴンドウ」が最も多く、デゴン、レゴンドウなど同じ語源から派生したと思われる「ゴンドウ」のつく名称が多かった。一方、県西部(山口市～下関市)では「ナメ」「ナメット」など「ナメ」のつく名称が多く、東西ではっきりと呼称が分かれた。この他「ボウズ」の名称が東西両方で見られた。明治以前の文献を見ると、スナメリの呼称は「ナメリ」「ナメイヲ」など「ナメ」を含む名称が最も古く、「デゴンドウ」は広島県や周防大島等で使われていた「ゼゴンドウ」の名称が語源である可能性が高い。現在の「スナメリ」の名前は、1808年の鯨史稿に記載されたことに基づくと推測される。

#### Abstract

A questionnaire survey on the local names of finless porpoise *Neophocaena phocaenoides* was conducted to fishery cooperatives in Yamaguchi prefecture, Japan. A small scale hearing survey was also conducted. A total of 20 different local names of finless porpoise was collected from 49 answers. These names were clearly divided into two groups distributed in the east and the west of the prefecture. In the eastern region, the most common local name was “De-gondo” and followed by “Re-gondo” and both include a word “Gondo” (Japanese name for pilot whales). Most of other names in the eastern region seem to be modification of them. On the other hand, in the western region, most common name was “Name” or “Nametto”, and most of other names include a word “Name”. “Bohzu” was collected from both regions, though it was rather rare. Investigation of old literature suggested that names with “Name” were old and common in Japan, whereas names with “Gondo” seemed to be originated from a name “Ze-gondo” which was used at central area of the Chugoku region in Edo era.

#### はじめに

スナメリはハクジラ亜目ネズミイルカ科に属する小型の鯨で、頭部が丸く吻や背鰭を欠く。成体の体色は淡い灰色で、体長は約1.8～1.9mである(笠松ら2009)。ペルシャ湾から日本にかけての熱帯・温帯アジアの沿岸部に分布しており、インド洋から南シナ海に分布する *N. p. phocaenoides*、揚子江に分布する *N. p. asiaeorientalis* および東シナ海、黄海、日本近海に分布する *N. p. sunameri* の3亜種が知られている(Shirakihara and Yoshioka 2009)。日本近海においては仙台湾～東京湾、伊勢湾・三河湾、瀬戸内海～響灘、大村湾、有明海・橘湾の5海域に主に分布しており、これらの海域間では外部形態やmtDNA塩基配列等の違いがあることから、互いに異なる5つの系群に分かれているものと考えられている(吉田2011)。またこれら分布域に共通する地域的特性は、水深50m以浅域が沖合まで伸びる遠浅で、海底質として砂泥質が卓越するとされ

ている(白木原2003)。

人間の生活圏に近い沿岸に生息する特性を持つためか、スナメリには昔から多くの異名(地方名)があることが知られている。例えば西脇(1965)は、具体的な地域は示していないものの、スナメリの別名としてナメノウオ、ナメウオ、ナメリ、スナメリクジラ、スナメリイルカを記載し、粕谷(1994)は伊勢湾でスザメ、瀬戸内海東部でナメあるいはナメノウオ、瀬戸内海西部でゼゴンあるいはゼゴンドウの名前を挙げている。白木原(2003)は、スナメリの分布を調べる目的で北海道を除く全国2053の漁業協同組合に行ったアンケート調査で、スナメリを他種と混同していないか確認のためスナメリの別名を質問項目に入れたところ、西九州ではナミノウオ・ナミウオ・ボウズウオ、瀬戸内海～響灘ではナメクジラ・ナメソ・デゴンドウ、伊勢湾、三河湾ではスニコザメ・スザメ、東京湾～仙台湾ではスナメリ、との回答を得たと述べている。

1) 公益財団法人下関海洋科学アカデミー鯨類研究室 〒750-0036 山口県下関市あるかぼーと 6-1

1) Whale Laboratory, Shimonoseki Academy of Marine Science, 6-1 Arcaport, Shimonoseki, Yamaguchi 750-0036, Japan.

山口県は瀬戸内海西部に位置し、関門海峡から北九州日本海側に続く響灘に至るスナメリの分布域に面しており、これらの海域では漁業者にとってもスナメリは比較的なじみ深い生物であると言える。上述の文献に照らせば、県内においてはスナメリの別名はゼゴン、ゼゴンドウ、デゴンドウ、ナメクジラ、ナメソが挙げられることになる。しかし、県内の下関市内においてすら、これら列挙された名前とは異なる名称を耳にしたり、逆に使われている様子が見られないものもあつたりする。そこで、下関海洋科学アカデミー鯨類研究室(下関鯨類研究室)では、県内において使われている地方名の収集とその分布について調査を行うこととした。

なお、スナメリの生物学的分類に関しては、背部の隆起の幅が狭い *N. p. asiaeorientalis* と *N. p. sunameri* の2亜種を *N. asiaeorientalis*、背部の隆起の幅が広い *N. p. phocaenoides* を *N. phocaenoides* として2種に分ける考え方がある(Wang and Reeves 2012)が、本報においては Shirakihara and Yoshioka(2009)および現時点での国際捕鯨委員会の分類(IWC 2012)に従い、*N. phocaenoides* 1種として扱った。

#### 材料・方法

調査は①スナメリ分布域の山口県漁業協同組合の支店および県内漁業協同組合(以下漁協)へのFAXによるアンケート調査を主とし、これに②聞き取りによる情報および③インターネット情報で地域の特定が可能な情報を加えた。スナメリの分布域は、Shirakihara et al. (1992)、白木原(2003)および下関鯨類研究室のストランディングデータベースに記録されているスナメリの漂着・混獲記録(図1)から、若干の例外はあるものの県内沿岸分布の北限を下関市豊北町角島付近と考えた。このためアンケートは、県内の海岸線を有する地域では萩市、長門市および阿武町を除く10市5町にありFAX番号が判明した69漁協に対し2012年10月に実施し、スナメリの地方名、いつ頃からその名を聞いたか、回答者の居住地(空欄の場合は漁協所在地とした)を質問した。氏名・年齢・性別は自由回答とした。聞き取りは任意に散発的に行い得られた情報を蓄積したが、漁協へのアンケート調査で回答が得られなかった山口市、防府市、周南市に関しては、市役所の水産担当課や地元の観光業者等にメールによる聞き取りを行った。

また、後述する山口県西側のスナメリ呼称の広がりを確認するために、響灘の福岡県側に位置する宗像市、遠賀郡、北九州市にある18の漁業協同組合および支所にも同様のFAXによるアンケート用紙を送付した。

#### 結果

県内の69漁協へのアンケートのうち22漁協・個人から回答があり(回答率31.9%)、のべ30の呼称が得られた。また聞き取りでは12人からのべ18の呼称が得られたほか、インターネットで県内の地域が特定できる呼称が1つ得られた。回答が得られた地域は県西部では下関市、山陽小野田市、宇部市に多く、県東部では熊毛郡上関町および周防大島町で多かった。一方、県央の山口市、防府市、周南市、下松市ではアンケートによる回答は得られず、聞き取りによる情報収集のみに頼った。また響灘の福岡県側への追加アンケートでは、遠賀郡岡垣町、同芦屋町と北九州市藍島の3件のみ回答があつた(回答率16.7%)。

回答者の年齢は判明した範囲で30歳代から80歳代、性別は判明した範囲で聞き取りの2名を除きすべて男性であった。「いつ頃から」の問いには「昔から」「子供の頃から」との回答が最も多く、具体的な年代を示した回答も、回答者の年齢が明記されている場合は10歳前後と考えられる場合が多かった。集計に際しては、明らかに同じ呼称と思われるが記載された名称の語尾が長音(ー)と「ウ」で異なる場合は、もともとの呼称が耳で聞いた音から記憶されたもので同一であると判断し「ウ」で統一した(例:「デゴンドー」と「デゴンドウ」は後者で統一)。その結果、「スナメリとしか呼ばない」との回答を除き合計20種の呼称が収集された。

表1に得られた情報を同じ呼称ごとにまとめ、図2にこれらの呼称の地域分布を示した。図2では回答者の居住地や所属漁業協同組合所在地を示したが、回答者の情報が「X X市」や「〇〇町」等の居住地でない広域情報の場合は、市町村役場の所在地もしくは近隣の港湾を推定地として表示した。同一の呼称で最も多かったのは「デゴンドウ」で9件、次いで「ナメ」と「ナメット」の各5件であったが、後者は「ナメト」「ナメットウ」も同一の呼称とすれば合計10件で最多となる。他の呼称の多くはこの両者から派生した語あるいは同じ語源から生まれた名称と思われるが、全く異なる呼称として「ボウズ」の名が散見された他、単に「イルカ」や「マメクジラ」と呼ぶとの回答もあつた。

一見して明らかなのは、若干の例外はあるもののスナメリの呼称が山口県の東西ではっきりと二分されており、県東部(熊毛郡上関町、周防大島町、柳井市、岩国市、玖珂郡和木町)では「デゴンドウ」に代表される「ゴンドウ」を含む呼称がほとんどであるのに対し、県西部(下関市、山陽小野田市、宇部市、山口市)では「ナメト」に代表される「ナメ」を含む呼称であった。なお、

表1 漁業協同組合へのアンケート、聞き取りおよびインターネットで収集された山口県内のスナメリの呼称。回答を得られた場所の概略は図2を参照のこと

スナメリの呼称	回答数	回答のあった地域	備考
レゴンドウ	3	大島郡周防大島、柳井市、熊毛郡上関	上関町ではレゴンドウよりデゴンドウの方が一般的
レゴン	1	柳井市～大島郡周防大島	レゴンもしくはレゴンドウ
デゴンドウ	9	大島郡周防大島、玖珂郡和木、岩国市(由宇・通津)、柳井市平郡島(西地区)、熊毛郡上関、周南市粕島	昔から呼び現在も使っている
デゴン	3	大島郡周防大島、岩国市黒磯	
デコンドウ	1	熊毛郡上関	同一者の回答。「デコ」は頭部の形状からそう呼ぶ
デコンゾウ	1		
デコ	1		
ボウズ	3	熊毛郡上関(祝島)、山陽小野田市埴生、下関市前田	
ボウズイオ	1	熊毛郡上関(祝島)	
イルカ	1	光市牛島	子供の頃から
ナメットウ	2	柳井市平郡島(東地区)、山陽小野田市郡	平郡島では東部でこの呼称を使う
ナメット	5	防府市、山口市、宇部市、山陽小野田市	
ナメト	3	山口市秋穂、山陽小野田市小野田(刈屋・焼野)	
ナメクジラ	1	宇部市東岐波	
ナメッポ	1	宇部市床波	
ナメタ	1	宇部市居能	同一者の回答。子供の頃から
ナメッタ	1		
ナメ	5	宇部市床波、下関市(彦島・豊浦)	
ナメユオ	1	下関市前田	戦後子供の頃から
マメクジラ	1	下関市長府	
スナメリ	4	下関市(長府才川・吉母・六連島・蓋井島)	何人かに聞いたがすべてスナメリとしか呼んでいない



図1 山口県及び福岡県におけるスナメリのストランディング分布。黒丸の位置は、下関海洋科学アカデミー鯨類研究室のストランディングデータベース緯経度情報(分単位)に基づく



図2 アンケートおよび聞き取りで得られた山口県におけるスナメリ地方名の分布。追加調査で得られた福岡県の3件を含む。黒四角の位置は、回答者の居住地や所属漁業協同組合所在地を示し、回答者の情報が「XX市」や「〇〇町」等の居住地でない広域情報の場合は、市町村役場の所在地もしくは近隣の港を推定地として表示した



この「ナメ」を含む呼称がさらに西に広がっているかを確認するために、響灘の福岡県側に送ったアンケート調査では、3件のみの回答であったが、下関市六連島に隣接する藍島、響灘の西端近くに位置する遠賀郡岡垣町でともに呼称は「ナメ」で、その中間にある遠賀郡芦屋町では「メリ」であった(図2、表1には示さず)。山口県の東西で呼称が変わる境界がどの付近にあるかは、県中部で得られた情報が少ないためはっきりしないが、隣接する西側の防府市で「ナメット」、東側の周南市で「デゴンドウ」の呼称がそれぞれ一件得られている(図2)ことから、呼称の変化はこの付近で起きているのであろうと推測された。

### 考察

粕谷と山田(1995)によれば、スナメリの名称で最も記載が古い書物は宝永6年(1709)に発行された大和本草で、ここでは「滑魚ナメリ、一名波の魚(ルビなし、ナミノウオもしくはナミノイヲと思われる)」と記載されている。また江戸時代中期に出版された挿絵入り百科事典である和漢三才図会では「鮠(ナメイヲ)、俗伝奈女魚」と記載されており、文献で見える限りの呼称は「ナメ」を含む語が最も古いことをうかがわせる。大和本草の作者である貝原益軒は黒田藩(福岡藩)藩士、和漢三才図会の作者である寺島良安は大坂の医師とされており、瀬戸内海の東西両端でこの当時から「ナメ」の名称が知られていたことになる。ナミノウオもしくはナミノイヲの名については、日本動物誌として紹介されるシーボルトの研究成果 Fauna Japonica にも記載されており(Temminck and Schlegel 1842, 小川 1973)、こちらは長崎県の大村湾で近代でもこの名称が使われている(水江ら 1965)とされるが、山口県内の今回の調査では収集されなかった。

一方、デゴンドウに代表される「ゴンドウ」の呼称は、江戸幕府の八代将軍吉宗の命を受けた医生丹羽正伯貞機が、1735年に全国諸領に指示をして編集を行ったとされる諸国産物帳(盛永・安田 1988)の中に見られる。中国地方で現存する産物帳およびその関連史料にはスナメリに関する記載が散見され、例えば芸藩土産図(原本は安芸国広島領産物絵図帳とされる、年次不明)及び萩領の周防国産物之内絵型(1737)には、ともに「ぜごんどう」と記載されており、後者の編纂に関連する文書とされる周防長門産物江戸被差出登候註書控(1737)、御内見之覚周防長門産物丹羽正伯へ不被差出御内見之覚(年次不明)では、「ゼゴンドウ」の他に「ボウズイヲ」の名が記載されている(盛永・安田 1988)

他、周防岩国吉川左京領内産物并方言(1736)でも「ゼゴンドウ」とある(盛永・安田 1989)。すなわち、広島県西部や山口県東南部の周防大島などでは古くから「ゼゴンドウ」の名があり、これがおそらく今回調査で収集されたデゴンドウやレゴンドウの語源になったと推測される。粕谷(1994)は、瀬戸内海西部の呼称としてゼゴンあるいはゼゴンドウと記載しているが、今回の調査では「ゼゴンドウ」の名前は出て来ておらず、どちらかと言えば広島県以東の呼称と言うことができよう。「ボウズイヲ」についても、山口県東南部の上関町に名前が残っていることが確認できたが、「ボウズ」の名は県西部でも散見された。「ボウズ」の名称は著者自身の経験で伊勢湾(三重県)でも耳にし、「漁の最中にスナメリが来ると魚を散らされてボウズ(不漁)になるから」と聞いたことがあるが、仙台では「海坊主」と呼ばれていた(小川 1973)との記載もあることから、頭部の形状から各地でそう呼ばれた可能性もある。

なお、今回の聞き取り調査の中では、「デゴンドウ」の名の由来はゴンドウ(クジラ)から来ているのではないかと指摘が複数あった。その根拠として、周防大島町出身の方からの聞き取りで、「昭和30~33年頃、体長が3~5mの黒い(明らかにスナメリではない)ゴンドウの群れを見て、地元では「デゴンドウの千匹連れ」と呼んだ」と具体的な説明をいただいた。また「デ」は「大」の方言である、との説明もいただいた。しかし前述の芸藩土産図に記載されている「ぜごんどう」の絵図は、背鰭が無く形態から明らかにスナメリとわかり、大きさについても「長さ四五尺」と小型であることが説明されている(盛永・安田 1988)ことから、当時から現地の人々がスナメリという種を他の鯨と識別していたことは間違いない。ただ、瀬戸内海にはまれにゴンドウ類、主にオキゴンドウが大群で進入することがあり、これらを特にスナメリと分けることなくまとめて現地の人間が「ゼ(デ)ゴンドウ」と呼んだ可能性は十分あると思われる。

現代の標準和名である「スナメリ」の名は、仙台藩の学者大槻清準が1808年に書いたとされる鯨史稿にスナメリクジラとして記載されており、「總州(現在の千葉県付近)方言」と説明されている(大槻 1808)。明治期に編纂された捕鯨彙考でも本種の名称はスナメリクジラで、別名「なめうを或いは波の魚」と記載している(服部 1887)ものの、以後の文献ではスナメリの名前が定着している(辻本 1918, 浅野 1933, 粕谷・山田 1995)。関東の方言とされるスナメリの名前が定着したのは、後年の研究者の多くが鯨史稿や捕鯨彙考を引

用したためと考えられるが、スナメリの名もまた語源をさかのぼれば大和本草の「ナメリ」なのかもしれない。

今回の調査は、調査手法を漁協へのFAXアンケートにほとんど頼っており、特に県央部での回収率が悪かったことから、調査範囲を完全にカバーしたとは言い難い。また回答をいただいた漁協でも、複数の方に聞いていただいた場合と、個人で答えられた場合があり、特に後者の場合、本当に地域の呼び名を反映しているかとの不安もある。しかしそれでも、県の東部と西部ではっきりとスナメリ呼称の傾向が分かれるという結果が得られたことは貴重な収穫と言えよう。古書を紐解く限りでは、東部の「デ(レ)ゴン・デ(レ)ゴンドウ」の語源は「ゼゴンドウ」であり、西部の「ナメ」を含む呼称の語源は「ナメリ」や「ナメイヲ」と見てよさそうである。今後はさらに調査範囲を拡大して、東西の異なる呼称がどのくらい広がっているのかを確認するとともに、伊勢湾や関東以北の他地域のスナメリの地方名についても収集し、それぞれの語源がどこにあるのか、またどの程度伝搬しているか等についても調べていく予定である。

#### 謝辞

山口県漁業協同組合本店指導課の室重和彦様には、漁協へのアンケートに関しご相談に乗っていただき、実施を快くご承諾をいただいた。また下関市立大学経営企画グループの大岡由紀子様には文献探しをお手伝いいただいた。ダイドックオーシャンカヤックの原康司様には調査にご協力をいただいた。皆様のご協力に深謝する。また個別の名前を挙げることはできないが、聞き取りおよびアンケートにお答えくださったすべての皆様に深く感謝する。

#### 引用文献

浅野彦太郎(1933)分類水産動物図説. 太陽堂, 東京.  
服部徹(1887)日本捕鯨彙考 前編. 大日本水産会, 東京.  
International Whaling Commission (2012) Taxonomy of Whales. <http://iwcoffice.org/cetacea>  
貝原益軒(1709)大和本草(巻之十三). 学校法人中村学園電子図書館貝原益軒アーカイブ, [http://www.nakamura-u.ac.jp/~library/lib\\_data/b01.html](http://www.nakamura-u.ac.jp/~library/lib_data/b01.html)  
笠松不二男・宮下富夫・吉岡基(2009)鯨とイルカのフィールドガイド. 東京大学出版会, 東京.  
粕谷俊雄(1994)スナメリ. In: 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料: 626-634, 水産庁, 東京.  
粕谷俊雄・山田格(1995)日本鯨類目録(鯨研叢書 No.

7). 日本鯨類研究所, 東京  
水江一弘・吉田主基・正木康昭(1965)九州西方海域産小型歯鯨類の研究一. 長崎県橘湾沿岸で捕獲されたスナメリについて. 長崎大学水産学部研究報告, 18: 7-29.  
盛永俊太郎・安田健(編)(1988)享保元文諸国産物帳 修正第VIII巻 備後・安芸・長門・周防. 科学書院, 東京.  
盛永俊太郎・安田健(編)(1989)享保元文諸国産物帳 修正第IX巻 周防(続). 科学書院, 東京.  
西脇昌治(1965)鯨類・鱈脚類. 東京大学出版会, 東京.  
小川鼎三(1973)鯨の話. 中央公論社, 東京.  
大槻清準(1808)鯨史稿(巻之二). 九大デジタルアーカイブ, <http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/kujira/geisiko/geisiko.html>  
白木原国雄(2003)日本におけるスナメリの分布. 月刊海洋, 35(8): 538-543.  
Shirakihara, M., Shirakihara, K. and Takemura, A. (1992) Records of the Finless Porpoise (*Neophocaena phocaenoides*) in the Waters Adjacent to Kanmon Pass, Japan. Marine Mammal Science, 8(1): 82-85.  
Shirakihara, M. and Yoshioka, M. (2009) *Neophocaena phocaenoides* (G. Cuvier, 1829). In: Ohdachi, S. D., Ishibashi, Y., Iwasa, M. A. and Saitoh, T. eds., The Wild Mammals of Japan: 390-391, Shoukadoh, Kyoto.  
Temminck, C. J. and Schlegel, H. (1842) Fauna Japonica. Mammalia; Reptilia. 京都大学電子図書館, <http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/b05/b05cont.html>  
寺島良安(1713)和漢三才図会(五十一 江海無鱗魚). 九大デジタルアーカイブ, <http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/wakan/>  
辻本満丸(1918)海産動物油. 丸善株式会社, 東京.  
Wang, J. Y. and Reeves, R. (2012) *Neophocaena asiaeorientalis*. In: IUCN 2012. IUCN Red List of Threatened Species. Version 2012.2., <http://www.iucnredlist.org/details/41754/0>  
吉田英可(2011)スナメリ 日本周辺. 平成22年度国際漁業資源の現況:(53)1-5. 水産庁・水産総合研究センター.